

同志社大学ライフリスク研究センター主催国際セミナーの解説

日時：2010年3月9日（火）16:00-18:00

場所：同志社大学扶桑館 107 教室

報告者：ロベルト・ザノーラ（ピエモンテ東大学教授：2010年度国際文化経済学会会長）

論題：ピカソの「正しい」価格—美術品収集におけるプライス・インデックス使用に関する新たな境地

解説：ザノーラ教授の報告は、美術品市場における価格形成のメカニズムを実証的に明らかにするための実証方法の説明と複数の実証方法のメリットとデメリットに関する評価についてのものであった。

第1の実証方法は、ヘドニック回帰法である。この方法は、オークションでの価格を、絵画のサイズ、スタイル、メディア、展覧会履歴、証明、制作時期、質、オークション会社、オークションが開かれた都市、販売時期、事前割当、推定価格、経済状態、オークションでの売買成立の有無といった変数によって説明するものである。この方法は、最も基本的な推定方法であり、データの利用可能性の点からも実用性が高いものである。

ヘドニック回帰法では、同一の絵画の価格変化要因を分析することができないため、再販回帰法を第2の実証方法として提示している。この方法は、同一の絵画の販売価格の履歴によって、価格変化要因を分析できる一方で、異なった絵画の価格を比較可能にするために標準化することが必要となることと、1度しか売買されていない絵画がデータセットから外れるために、データ数が減少することが問題となる。

そこで、第3の方法として、絵画の異質性に伴う問題を回避するために、同質的な代表的絵画にデータを制約して回帰分析をしたり、絵画の価格で市場をある比率（例えば20%づつ）に分割して、それぞれの分割された市場別に回帰分析を行う手法が提示されている。

最後に提示された実証方法が、ヘックマン選択法（Type II Tobit）モデルである。これは、2段階推定の第1段階で、売買の有無を説明し、第2段階では第1段階で推定に用いた説明変数とは異なった説明変数と、売買有無の条件に関する情報として第1段階で推定されたミルズ比率を説明変数に入れて価格を推定するものである。この推定方法は、理論的に望ましい性質を持っている。

ザノーラ教授の報告は、アート財のようにストックとしての価値が存在する財の市場均衡形成メカニズムを分析したものとして、単に文化経済学の領域だけではなく、理論経済学の領域でも重要な示唆を与えている。特に、価格履歴が価格形成に重要な意味を持つ市場においては、供給者側も逆に価格履歴を最適にコントロールする戦略を採用するために、均衡形成のプロセスはかなり複雑なものとなり、今後の研究の余地は大きいと考えられる。

（文責 同志社大学経済学部 八木 匡）